

生命科学研究科

東北大学大学院



生命科学研究科は今、

Graduate School of Life Sciences, TOHOKU UNIVERSITY

2008

新たなる一步に寄せて

生命科学研究科の

昨年の脳科学グローバル COE 採択に引き続き、今年は学際複合領域に申請した生態学のグローバル COE が採択されました。本誌にその詳細が報告されておりますが、これまでの苦労を思い返しますと「これは快挙である」と、私はとりあえず素直に喜びたいと思います。脳 GCOE 申請の生命科学領域、今年の学際複合領域だけが、これまで本学が COE 申請で採択されなかった領域であります。本研究科の研究者はこれら 2 つの GCOE の他、化学、および医学の GCOE においても重要なプログラム実施者となっており、研究科の教授と准教授の全体数のうち、いまや 41% の研究者がグローバル COE 実施者となっております。これらのこととは本研究科が設立 8 年目にしてようやく全学的にも存在意義を發揮できる組織となったことを意味し、またその土台として、研究科構成員の水準が客観的にみても高いレベルに到達していることを示すものと思われます。

前文には「これまでの苦労」という言葉が、唐突に出てきました。これまで研究科構成員の誰もが多くの苦労を乗り越えて今日を迎えております。私の立場からは 2 つの苦労の要因が上げられます。1 つは研究科独自の建物が無く、市内の 4 ヶ所に散在して研究・教育活動を続けていること。これについては後に本誌の中でふれますので省略します。2 つ目の大きな要因は本研究科の構成そのものにあった、と思います。生命科学の幅広い知識や技術を有し、世界的に活躍できる人材を育成しようという理想から、研究科は生命科学の幅広い領域をカバーする構成となっており、それは研究科ホームページのバナー標語「分子・細胞・個体から脳・生体・環境を科学する」に良く表れております。これほど多くの領域をカバーする生命科学研究科は他大学にはありません。しかし、理想とは裏腹にこのことが外部評価などで、研究科の顔・特徴が見えない、いまの競争社会ではかえってマイナスではないか、などのご意見につながったことも事実です。しかし私たち、そのようなご意見をいただく前から、かかる状況を懸念し、以下の 4 つの重点研究項目を定め、人事なども含めて戦略的に研究・教育水準の向上を図ってまいりました。冒頭に紹介した GCOE の採択などは、私たちの取組みが徐々にではあるが、成果として現われてきた証ではないでしょうか。

- 1) 高次脳機能を支える神経基盤の構築と動態の研究
- 2) 生体シグナルとセンシングの分子、細胞、個体レベルの統御機構の研究
- 3) 環境変動下における高次生命システムの創出・維持・保全の研究
- 4) 高次生命現象の統合的理解のためのゲノム、ポストゲノム研究

さて、喜んでばかりもいられません。1 つの評価としての GCOE 採択に振り回されず、今こそ私たち、どっしりした科学を進めているかという自己点検を十分に行うことが必要ではないでしょうか。それこそが今後の激動に対処する最良の方策と思われます。図らずも今回採択された GCOE の「環境激変への生態系適応に向けた教育研究拠点」という表題には研究・教育の世界で生きる私たちの適応とは如何にあるべきか、を考えさせるものとなっているようにも思われます。

最後になりましたが本研究科の研究・教育の推進に日頃より、暖かいご支援をいただいております多くの方々に心から感謝申し上げるとともに、今後とも変わらぬご指導を賜りますよう心からお願い申し上げます。



副学長・生命科学研究科長
飯島 敏夫

生命科学研究科の構成

平成 20 年 6 月 1 日現在



生命科学研究科(片平本館)



青森



浅虫海洋生物学研究センター

仙台

木更津



かずさDNA研究所

教員数 総計 102 名

■ 基幹講座 計 72 名

教授 24 名

准教授 22 名

講師 2 名

助教 20 名

助手 4 名

■ 協力講座 計 25 名

教授 8 名

准教授 4 名

講師 1 名

助教 12 名

■ 連携講座 計 3 名

教授 2 名

准教授 1 名

■ 協力教員 計 2 名

教授 2 名

大学院生 319 名

■ 前期・修士課程 216 名
(M1:106、M2:110)

■ 後期・博士課程 103 名
(D1:27、D2:39、D3:37)

分子生命科学専攻

遺伝子科学、生化学、有機化学的アプローチを基盤として、DNA から生物活性分子にまたがるさまざまな機能分子の構造と、高次生命システム内での機能性および生体応答の関係を、多面的かつ系統的に解明するための教育研究をおこなう。本研究科におけるすべての研究の分子基盤を作り、高次生命システムを分子機能から統一的に理解する基礎とする。

生命有機情報科学講座

生命構造化学分野 佐々木 誠
分子情報化学分野 有本 博一
活性分子動態分野 選考中
生命素子機能分野 村本 光二

生命有機情報科学講座

遺伝子変異制御分野 山本 和生
遺伝子調節分野 十川 和博
情報伝達分子解析分野 水野 健作
分子応答制御分野 草野 友延

生体機能分子科学講座

生体機能分子設計分野 清水 透
生体機能分子解析分野 古山 種俊
生体機能分子制御分野 斎藤 正男
生体機能分子計測分野 石島 秋彦

生命機能科学専攻

細胞の各種機能が制御されつつ発揮される機構を解明し、高次生命システムとしての多様な多細胞体が形成される機構を研究する。さらに高次生命体に発達した情報の統合的処理を実現する脳の機能や、その形成機構を解明する。

細胞機能構築統御学講座

膜輸送機構解析分野 福田 光則
細胞認識応答分野 牟田 達志
植物細胞壁機能分野 西谷 和彦
多様化機構分野 西谷 和彦(兼)
器官形成分野 田村 宏治

脳機能解析構築学講座

脳機能遺伝分野 山元 大輔
脳機能解析分野 八尾 寛
脳情報処理分野 飯島 敏夫
脳構築分野 仲村 春和

海洋生態学講座

発生生物学分野 加藤 秀生
海洋生態行動学分野 占部 城太郎(兼)

分化制御学講座

分子免疫分野 佐竹 正延
分化再生制御分野 選考中
神経機能制御分野 小椋 利彦
遺伝子機能研究分野 安井 明
遺伝子導入研究分野 高井 俊行

生態システム生命科学専攻

生命環境について、そのシステムの基本となる生物多様性的形成・維持機構を分子、細胞、個体、個体群の間の相互作用として研究するとともに、生態系を構成する多様な生物の遺伝的基礎と機能、それらに対する環境変動の影響を明らかにすることによって、生命環境の将来を予測し、それに基づいた生物と生命環境の制御、保全を可能にする。

環境遺伝生態学講座

遺伝情報動態分野 津田 雅孝
植物生殖遺伝分野 渡辺 正夫
臨界環境遺伝生態分野 高橋 秀幸(兼)
地図共生遺伝生態分野 南澤 究
宇宙環境適応生態分野 高橋 秀幸

進化生態学講座

ゲノム継承システム分野 東谷 篤志
生物多様性進化分野 河田 雅圭
機能生態分野 中静 透
マクロ生態学分野 占部 城太郎

植物構造機能進化学講座

植物構造機能進化分野 鈴木 三男
地域生態学講座

地域生態学講座

ゲノム構造機能分野 柴田 大輔(客員)
長瀬 隆弘(客員)
地域生態分野 菊地 永祐

客員教授

Menno P. Witter
城所 良明

事務部

事務長 門脇 豊
庶務係 係長 三浦 俊彦
佐藤 恵美子
南部 祥代
教務係 係長 小沼 隆悦
泉田 幸惠
笹原 央
会計係 係長 大場 泰行
中川原 敏
高橋 照幸
寺島 なお子

それぞれの指のかたちの違いの分子メカニズムを解明

神経機能情報研究分野・助教の鈴木らはアメリカ Wisconsin 大との研究により、親指から小指にかけての指のかたちの違いは、胎児期において指の発生中に指先の細胞群が受け取る BMP (骨形成成長因子) の量的な違いによって生み出される事を解明した。

Suzuki T., Hasso S.M., Fallon J.F. (2008)

Unique SMAD1/5/8 activity at the phalanx-forming region determines digit identity.

Proc Natl Acad Sci USA 18, 4185-4190.

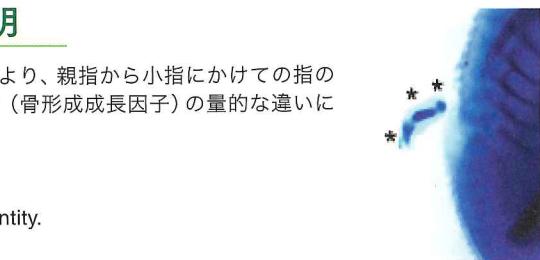


図：ハワイ島だけに生息するショウジョウバエ、*Drosophila heteroneura* の二頭の雄が頭部をぶつけ合って争う様子（近藤康弘博士提供）。

ゲノムの再編成から種分化の謎を解く研究

キイロショウジョウバエ (*Drosophila melanogaster*) は遺伝学のモデル生物としてとりわけ重要である。ゲノム配列を同属の12種間で比較することによって、種分化の遺伝子メカニズムや進化的に保存された未知のDNA配列についての手がかりが得られた。脳機能遺伝分野（山元研究室）はハワイ固有種での遺伝子マッピングに大きく貢献した。

Abad, J. P. et al. (Yamamoto, D.) (2007) Evolution of genes and genomes on the *Drosophila* phylogeny. Nature 450, 203-218.



細胞仮足の形成におけるコフィリンの機能を解明

移動細胞の先導端ではアクチン重合により仮足が形成される。仮足形成にはコフィリンが必要であることが知られていたが、アクチン脱重合因子であるコフィリンがなぜアクチン重合に必要かは不明であった。私たちは Dronpa-アクチンを用いたライブイメージングにより、コフィリンが重合に必要なアクチンモノマーを供給することにより仮足形成に関わることを実証した。

Kiuchi, T., Ohashi, K., Kurita, S., and Mizuno, K. (2007) Cofilin promotes stimulus-induced lamellipodium formation by generating an abundant supply of actin monomers. J. Cell Biol., 177, 465-476.



図：光活性化したDronpa-アクチンが仮足の先導端に取り込まれる様子

黄色植物の青色光センサーを世界で初めて発見！オーレオクロムと命名



黄色植物は地球上の物質生産の大半を担うが、その生理や生態の研究は陸上植物に比べ、非常に少ない。今回、片岡准教授のグループは黄色植物(不等毛類、光合成をするストラメノパイル)に属するフナシミドロの光形態形成反応を起こす青色光受容体を発見した。

Takahashi F, Yamagata D, Ishikawa M, Fukamatsu Y, Ogura Y, Kasahara M, Kiyosue T, Kikuyama M, Wada M, Kataoka H (2007) AUREOCHROME, a photoreceptor required for photomorphogenesis in stramenopiles.

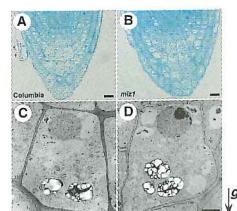
Proc Natl Acad Sci USA 104 (49) : 19625 -19630.

根が水に向かって伸びるための遺伝子を発見－陸上植物が乾燥地で生きる知恵－

今回、高橋教授研究グループは、シロイヌナズナで水分屈性を失った突然変異体を単離することに成功し、その突然変異の原因遺伝子をつきとめ、世界ではじめて、陸上植物が根を水の多い方向に伸ばすのに必要な制御分子を見出した。

Kobayashi A, Takahashi A, Kakimoto Y, Miyazawa Y, Fujii N, Higashitani A, Takahashi H (2007) A gene essential for hydrotropism in roots.

Proc Natl Acad Sci USA 104: 4724-4729



自家不和合性・雌ずいS因子と花粉管伸長制御因子を解明

奈良先端大の高山教授との共同研究により、アブラナ科植物の自家不和合性雌ずい側因子であるSRKの下流で機能する因子として、MLPK (M Locus Protein Kinase) が、SRKと直接相互作用することで、不和合性機能を維持していることを明らかにした (Kakita et al. (2007) Plant Cell 19: 3961-3973)。花粉の発達、花粉管の伸長には様々な植物ホルモンが機能していることは予想されていたが、実際に、どのような場面で機能しているかは不明であった。この点に関して、名古屋大の松岡教授との共同研究により、植物ホルモン・ジベレリンが花粉の発達・花粉管の伸長を制御していることを明らかにした (Chhun et al. (2007) Plant Cell 19: 3876-3888)。

■ 最近の報道記事

◆グローバル COE

| 順位 (昨年順位) | 大学名 | 採択件数 |
|--------------|-------|------|
| 1 (2) | 東京大 | 10 |
| 2 (4) | 東北大 | 7 |
| 3 (2) | 京都大 | 6 |
| 4 (1) | 大阪大 | 4 |
| 4 (7) | 慶應義塾大 | 4 |
| 6 (7) | 北海道大 | 3 |
| 6 (4) | 東京工業大 | 3 |
| 6 (7) | 名古屋大 | 3 |
| 6 (6) | 早稲田大 | 3 |

文部科学省は18日、大学院の優れた教育研究拠点の形成を重点的に支援する「グローバルCOE(革新的した拠点)プログラム」の08年度の審査結果を発表した。315件の申請があり、国立大は21大学で55件、私立大は8大学13件が採択されたが、公立大は0件。大学別では東京大が最多の10件で約15%を占めた。

同プログラムは07年度に始まり、1件当たり平均で年2億6千万円が交付される大型事業。2年目となる今回は医学系▽数学・物理学・地球科学▽機械・土木・建築・その他工学▽社会科学▽学際・複合・新領域の5分野で審査が行われた。

2008年6月19日 朝日新聞

◆ 宇宙への挑戦

宇宙滞在の“壁”に挑む

微小な力の繰繰、筋肉が減るのではなくか。
「東北大の東は、
ば、大河原の、の源流由来の
實験」の如きの讀み方を
「練習の約半個の邊野子
の4割は、間伐を重視し、神羅
生木にいたる。口成林などなる
ので、培養園は、此式で選えた
影響を讀んでやる。

筋力の衰え、線虫で分析
を船内装飾用の通間板と銅
青する。素性は、15日目に半ば
代の半分を経た。15日目に半ば
のもので生まれた第2世代を
冷凍する。両面を持て帰って
比べ、微小部分のもとで筋肉
が衰えていたかを観察する。
現在、有力な結果得た。(ある
「筋肉をいい加減に扱うの
はたまのことが多かった」) そこ
の結果、「筋肉のたぬき質を
うながす」として、筋肉の構造
の分解能など(?) によって筋肉
が衰えるんだ。一方が向
時に起きている可能性も含め
て線虫を分析する。半曲で、
長期間滞在しても筋肉が衰
ないかの観察につながるかも
(つまづき)

2008年5月23日 東谷教授 朝日新聞

◆ 脑研究

異性愛か同性愛か決め手は

ショウジョウバエで解明進める東北大



フルートレスたんぱく質により構造が異なるオス(左)とメス(右)の脳。オスは神経核 AⅠから伸びる線状の神経突起が頗著—山元教授提供

The image shows a scanned page from the Asahi Shimbun newspaper. At the top left, the date "2007年11月1日" and the author's name "山元教授 朝日新聞" are printed. The main title "重力わずか 植物どうな" is centered above a large photograph of a scientific apparatus. Below the title, the text discusses the effects of reduced gravity on plants, mentioning Professor Yamamoto's work at Tohoku University and the use of a centrifuge to simulate different gravitational fields. The bottom right corner of the page contains the newspaper's logo.



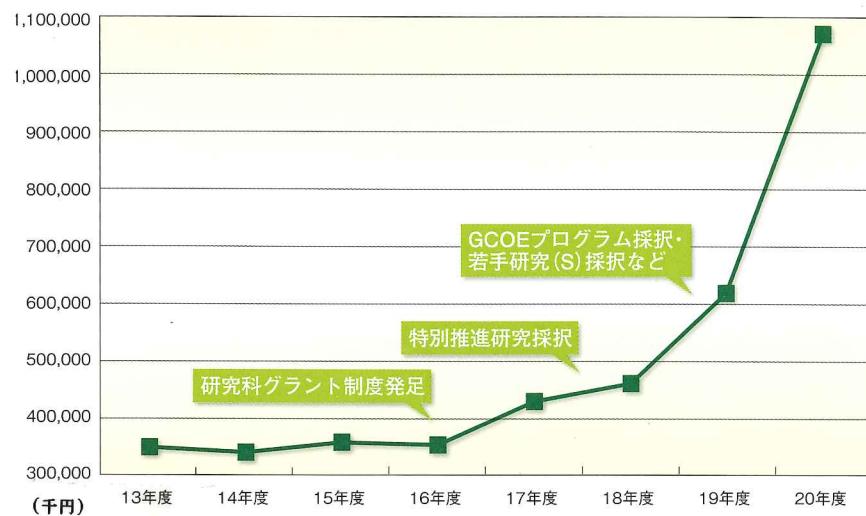
先行実験

重力わずか 植物どうなる

くなど、米国は基礎研究よりも、宇宙環境が人体に与ぼす影響や対策についてのよう、将来的探査に役立つ実用的な研究を使うよう方針を変えている。設置が順調に進めば、「きぼう」は来年にも完成する。「きぼう」を舞台にしてた実験は、10年までに22のテーマを達成することが目標だ。「日本の宇宙実験は新たな段階に入る」と西谷さんは期待している。

2008年1月17日 西谷教授 朝日新聞

◆外部資金の獲得状況（科学研究費、GCOE 費の獲得）



研究科設立から現在までの科学研究費とGCOE獲得状況を示している。それ以外の大型外部資金や受託研究費は含めていない。

当研究科の教員一人当たりの科研費獲得額(総額を科研費申請可能な研究員数で割った値)は東北大学全体でもトップクラスである。

※平成19年度、20年度はGCOEプログラムの研究費も含む

※平成20年度は6月18日現在のデータで、生態適応GCOEの要求額も含む

◆生命科学研究科執筆論文状況



当研究科の教員が執筆に携わった論文を示す。インパクトファクター(IF)は平均3.0を超えており、発表論文の質は高い状態を維持している。

第5回(平成19年度)日本分子生物学会三菱化学奨励賞



平成19年12月 福田光則教授

生命機能科学専攻・膜輸送機構解析分野の福田教授は、「膜輸送の異常により発症するヒト遺伝病 Griscelli(グリセリ)症候群」に焦点を当て、この病気の分子レベルでの病態解明に取り組みました。Griscelli 症候群は、膜輸送を司る低分子量 G タンパク質 Rab27A の欠損により色素異常(メラノサイトにおけるメラニン色素輸送障害)や分泌不全などを併発する重篤な遺伝病ですが、その発症の分子メカニズムはこれまで明らかではありませんでした。福田教授は、Rab27A に特異的に結合する分子群(Slp と Slac2)を同定し、Rab27A を介するメラニン色素輸送や分泌の分子メカニズムを初めて解明し、当該研究分野の発展に寄与したことが高く評価されました。

「環境激変への生態系適応に向けた教育研究」が グローバル COE に採択

生命科学研究科中静透教授を拠点リーダーとする

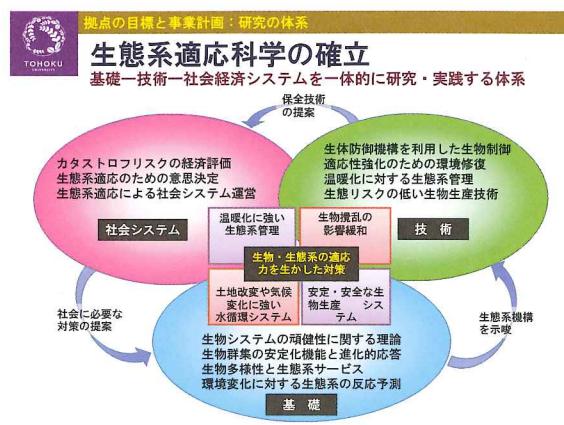
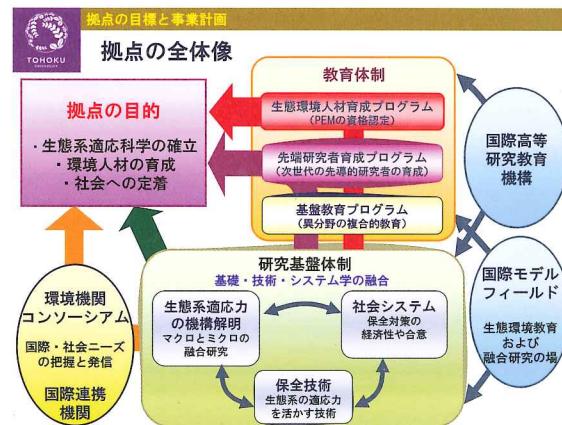
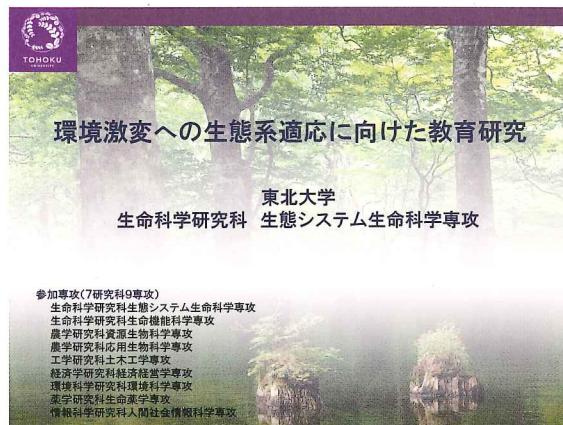
グローバルCOEプログラム(生態GCOE)が学際複合領域分野で採択されました。

生命科学研究科の生態学分野の実績と今後予測される環境変化に向けた研究と人材育成計画が認められ、本拠点プログラムは高い評価を受けました。本拠点は、生命科学研究科生態システム生命科学専攻の生態学関係の教員を中心に、生命科学研究科の遺伝、発生、免疫などミクロ生物学の研究者などを加え、拠点事業担当者の約半数の9名が生命科学研究科の教員です。生命科学研究科の他、農学研究科、薬学研究科、工学研究科、環境学研究科、経済学研究科、情報科学研究科が本プログラムに参加します。

この拠点では、今後の避けられない地球環境変化に対して、生物や生態系の適応力を生かした分野融合的対策に関する研究や人材育成を目的とします。そのために生態系適応科学という新しい分野の研究を推進すると同時に、研究機関だけでなく、企業、国際機関、自治体など社会で活躍できる人材を育てることで、キャリアアップに力をいれ、大学院生やポスドクなどの若手研究者の研究社会、実社会進出を応援します。

研究科の生態 GCOE 事業担当者 :

中静透（拠点リーダー）、河田雅圭、占部城太郎、津田雅孝、高橋秀幸、牟田達史、田村宏治、彦坂幸毅、千葉聰



2年目に入った脳グローバル COE

昨年、大学院生命科学研究科および医学系研究科の連携により、生命科学分野のグローバル COE として「脳神経科学を社会に還流する教育研究拠点」が立ち上りました。この1年の活動のいくつかを紹介します。

生命科学研究科の従事者は飯島敏夫、筒井健一郎、仲村春和、福田光則、八尾 寛、山本大輔、小椋利彦(協力講座)です。



キックオフシンポジウム in 仙台



東北大学脳科学 GCOE 「第1回脳カフェ：杜の都で脳を語る」

一般の方へ脳科学を紹介する「第1回脳カフェ：杜の都で脳を語る」が2007年12月16日に、せんだいメディアパークにて開催されました。



外国人講師による授業の国際化

客員教授として海外から優れた研究者を招聘し、国際性の高い授業が開始された。写真は Menno P. Witter 教授の授業。

Menno Witter, PhD
Professor Neuroscience,
Dept. Neuroscience
Kavli Institute for Systems
Neuroscience, Centre for the
Biology of Memory
MTFS, Norwegian University of
Science and Technology (NTNU)



第1回蔵王国際カンファレンス

脳科学 GCOE 第1回国際カンファレンスを2008年1月23日(水)から24日(木)の2日間にわたって宮城蔵王ロイヤルホテルにて開催。カンファレンスには日本を含む7カ国から約83名の研究者が参加した。カンファレンスのテーマとして「From Genes to Development and Behavior」が掲げられ、脳という共通の対象に対してミクロからマクロまで幅広い視点に立った研究が発表された。

平成19年度 生命科学研究科長賞について

生命科学研究科では、総長賞及び研究科長賞を課程修了予定者の自薦により募集し、6名の教員による選考委員会で表彰候補者を決定しています。平成19年度の受賞者は下記のとおりで、平成20年3月学位記授与式終了後、研究科長室において研究科長賞の授与式が行われました。

平成19年度 総長賞表彰

| 氏名 | 学年 | 専攻 | 指導教員 |
|------|----|--------------|------|
| 北澤大典 | D3 | 生態システム生命科学専攻 | 高橋教授 |

平成19年度 生命科学研究科長賞

| 氏名 | 学年 | 専攻 | 指導教員 |
|-------|----|--------------|-------|
| 御領憲治 | M2 | 分子生命科学専攻 | 十川教授 |
| 川崎あきは | M2 | 生命機能科学専攻 | 山本准教授 |
| 清水雄一郎 | M2 | 生態システム生命科学専攻 | 占部教授 |
| 今野歩 | D3 | 分子生命科学専攻 | 小川准教授 |
| 渡邊英博 | D3 | 生命機能科学専攻 | 水波准教授 |
| 宮崎亮 | D3 | 生態システム生命科学専攻 | 津田教授 |



平成19年度生命科学研究科内グラント賞受賞者

生命科学研究科では、基礎研究の支援と若手研究者の飛躍を助力することを目的に研究科内グラント制度を平成16年度より実施しています。

平成19年度の受賞者は以下の通りとなりました。

| 受賞者名 | 役職 | 所属 | 研究課題 |
|------|--------|---------------|---|
| 伊藤敬 | 助教 | 膜輸送機構解析分野 | メラノソーム形成における膜輸送メカニズムの解明 |
| 横山仁 | 助教 | 器官形成分野 | 器官形成・再生の開始と領域化に関する研究 |
| 高田美信 | 技術一般職員 | 植物生殖遺伝分野 | 自家不和合性 Brassica における Arabidopsis 型 S 遺伝子座領域の比較ゲノム構造解析 |
| 阿部広和 | 技術一般職員 | 浅虫海洋生物学研究センター | 海洋生物の水槽内長期飼育法の確立 |

生命科学研究科プロジェクト研究棟建設の ご報告と関係各位へのお礼

副学長・生命科学研究科長 飯島 敏夫

生命科学の新しい研究・教育拠点として東北大学で本研究科が計画されたのは、1996年にさかのぼります。それから5年後の2001年4月に大学院生命科学研究科が誕生しました。理学研究科生物学専攻、化学専攻の一部、医学系研究科および加齢医学研究所の一部、農学研究科の一部、遺伝生態研究センターの集合により基幹講座が出来、多元物質科学研究所、加齢医学研究所、理学研究科、東北アジア研究センターからの参加で協力講座を構成しました。研究科の設立趣旨から、本学で生命科学に従事する研究者が結集することにより研究・教育水準の高度化が図られ、新しい研究領域が創造されるなどが期待されました。しかし設立からこれまでの8年間、皆が集合して研究・教育活動を行う場に恵まれず、私たちは旧母体のある仙台市内の4か所に散在してまいりました。

独自の研究棟を持たないことは研究と教育の両面において大きな障害となっていました。例えばプロジェクト申請の計画を練るにも、頻繁にメンバーが集合し議論することを難しくし、学生は授業のために仙台市内を大変移動しなければならない、という具合です。運営面におきましても、例えば、研究科全体で新しい試みに挑戦しようという場合に、「旧帰属母体でそれぞれの文化がある…」というようなご意見を頂いたり、学生のアンケートでは「一体感が感じられない」などがありました。このような課題に加え、本学の青葉山移転計画の進行に伴い、雨宮地区に居住する4分野、片平南地区に居住する2.5分野の教員、学生は居場所のない状況に追い込まれることとなりました。

これまで私たちは研究棟建設に向けて精一杯の努力を行ってまいりました。本学執行部、施設部からも大変なご支援、ご指導を頂いたわけですが、「時に利あらず」ということでしょうか、近年の国の財政事情などから、新規の建物は殆ど認められないという状況が続いております。しかし昨年、現執行部が、「かかる停滞した状況を突破するには従来にない施設整備の手法でいくしかない」、「内部資金を活用して事態の突破を図る」、という判断を下されたことにより、事態は大きく転換いたしました。近年、本学執行部は「本学全体の生命科学の振興が東北大学をさらに伸ばす上で不可欠」ということを強く認識されておりましたが、現、井上総長はそれを井上プラン2007(8)の中で明確に示されました。これらのことが先の英断の背景となり、研究科の新棟建設を実現させたものと私は考えております。

今回の建物の建設により、4ヶ所の散在状態が半分の2か所となる可能性がでてまいりました。その意味では全体合流に向けてまだ一步を踏み出したところなのですが、これまで苦労を共にしてきた教員、事務職員、そして学生と、まずは素直に、この喜びを共感したいと思います。教職員、学生が一堂に会することのできる大講義室が確保できるなどから、ますます研究科の士気は高まるものと思います。このような状況を生み出すためにこれまで大変なお骨折りをいたいたいた関係各位に対しまして、衷心より感謝を申し上げる次第であります。



プロジェクト研究棟の完成イメージ。
上は南側から、下は北側からの俯瞰図。

生命科学会 活動内容

生命科学研究科では、地域分散による一体感不足解消策のひとつとして生命科学会を発足させ、活動しています。主な活動内容としては、4月の新入生歓迎会、秋のソフトボール大会、芋煮会、3月の修了祝賀会などがあります。



「平成19年度 修了祝賀会」

平成19年度修了者125名(修士102名、博士23名)を送り出しました。



「生命科学会会长賞受賞者」

学位論文発表の優秀者に対し、修了祝賀会の席にて生命科学会会长賞が授与されました。

■ 5年間の歩み

| | 平成16年度 | 平成17年度 | 平成18年度 | 平成19年度 | 平成20年度 |
|-----------|--|-----------------------------------|---|---|------------------------------|
| 研究 賞 | 日本放射線影響学会 奨励賞 | 第4回インテリジェン ト・コスマス奨励賞 | 第24回日本化学会 学術賞 | 第1回みどりの学術賞 | |
| | J Plant Reserch Best Paper Award 2004 | GGS Prize論文賞 日本遺伝学会 | 第20回ノバルティス 研究奨励賞 | 第5回日本分子生物 学会三菱化学奨励賞 | |
| | 日本植物学会賞若手 奨励賞 | 第23回日本化学会 学術賞 | 第1回アジア最先端 有機化学国際会議 Lectureship Award受賞 | 廣瀬忠樹名誉教授が オランダユトレヒト大 学から名誉博士号を授 与" | |
| | 日本農學賞 日本分析化学会賞 | | 花王研究奨励賞 | | |
| | 第3回日本生態学会賞 | | 日本植物学会奨励賞 | | |
| | 日本生態学会論文賞 | | | | |
| | 日本陸水学会吉村賞 | | | | |
| 競争的 資金 | | | 特別推進研究採択 | 脳科学GCOE プログラム採択 | 生態適応GCOE プログラム採択 |
| | 単位認定セミナー制度 導入 | 平成18年度実施の カリキュラム改訂 | | 若手研究(S)採択 (1件) | 若手研究(S)採択 (2件) |
| 教育の取組 | 開講講座 | 高校生のための 生命科学実習講座 | 英語科学論文の書き方 講座 | 客員教授による解剖学 特別講座 | 英語科学論文の書き方 講座 |
| | 開催シンポジウム | 生命科学研究科 フォーラム第1回 公開シンポジウム | 市民公開シンポジウム 「大地の微生物: 大いなる未知」 | 中静透教授 「みどりの学術賞」 受賞記念講演会 | 東北大学生態適応 GCOE発足 シンポジウム |
| | | 生命科学研究科 フォーラム第2回 公開国際シンポジウム | 東北大学大学院 生命科学研究科 公開シンポジウム 「脳のつくりとはたら き—大学から社会への 発信」 | 東北大学生命科学 研究科フォーラム 「環境変化の緩和と 生態系激変への適応」 | 東北大学脳科学GCOE 発足 シンポジウム |
| 研究科の運営 | 研究科グランツ制度 発足 | 浅虫海洋生物学研究 センターの移管 | 外部評価委員会開 | 生命科学研究科設立 7周年記念行事 | |
| | インターネットの整備 | 生命科学教員会議の 設置 | | 附属浅虫海洋生物学 研究センターに 新分野を開設 | |
| | 運営機構の設置 | 生命科学同窓会の 設立 | | | |
| | 研究推進委員会の 設置 | 生命科学会の設立 | | | |
| | 評価委員会の設置 | 助手任期制の採用 | | | |
| | 人事戦略委員会の 設置 | | | | |

東北大学大学院 生命科学研究科
<http://www.lifesci.tohoku.ac.jp/>

紙面の制約から、ここにお知らせしたのは生命科学研究科に関するほんの一部の情報です。

詳しくは最近リニューアルした生命科学研究科ホームページ <http://www.lifesci.tohoku.ac.jp/> をご覧ください。

また、研究科内の方はインターネット<http://db.katahira.lifesci.tohoku.ac.jp/intra/pages/index.jsp>もご活用ください。